

Juvenalisにおける *exempla maiorum*

谷 栄 一 郎

I

Juv. の生涯について知られていることは非常に僅かであるが、彼が弁論術の訓練を受けたことは確かである⁽¹⁾。彼の作品が弁論術の強い影響を受けて書かれたことは否定出来ない。Cicero, *De Or.* I. 18及びQuintil. XII. 4 に「oratorたる者は歴史、神話、英雄伝説のあらゆる *exempla*に通じていなければならない。」と言われている。Juv. も *exempla*の豊かな蓄えを持っていたことは作品から明白である。*exempla*には範とすべき *exempla*と避けるべき *exempla*があるのであるが、避けるべき *exempla*の方はJuv. の時代に近いものが大部分なので、ここでは範とすべき *exempla*にのみ注目して、その *satire*における機能を調べ、併せてJuv. の価値観を探ってみたい。

一般のローマ人にとって *exempla*はローマの先人 *maiores*から取られるのが普通であり、Juv. も同様なのであるが、後期になると哲学者 *sapientes*からも *exempla*をひいてきている。しかし、*sapientes*については後で述べることにする。

Juv. にとって *maiores*とは何であったかが問題であるが、その前に古典期の作家にとって *maiores*が何であったか見ておきたい。

Ciceroは *De Off.* I. 62で *maiores*として *Cocles, Decii, Cn., P. Scipiones, Marcellus*をあげている。これらはすべてJuv. の *satire*の中に登場する。*Pro Cael.* 39では質実剛健を宗とした英雄として *Camillus, Fabricius, Curius*があげられているが、これらもJuv. に取り上げられている。*Tus.* I. 110では不滅の栄光を獲得した英雄として *Curius, Fabricius, Calatinus*, 両スキピオ, *Fabius Maximus, Marcellus, Paullus, Cato, Laelius*があがっているが、Ciceroに特徴的な *Calatinus*と *Laelius*を除いてすべてJuv. に出てくる。これらの英雄カタログは他の古典期の詩人達にも共通していて、例えばHor. *Ode.* I. 12では歌うべき英雄達として *Romulus, Numa, Tarquinius, Cato, Regulus, Scaurus, Paullus, Fabricius, Curius, Camillus*があがっており、英雄として問題な *Tarquinius*と *hexameter*には入りにくい *Regulus*を除いてJuv. と共通している。Vergiliusは *Georg.* II. 169f. で *Italia*の生んだ英雄として *Decius, Marius, Camillus, Scipio*をあげているが、これらもすべてJuv. と共通している。*Aen.* VI. 756以下の所謂 *Heldenschau*に於ては *Romulus*以下, *Numa, Tullus Hostilius, Ancus Marcius, Tarquinius, L. Brutus, Decius, Drusus, Torquatus, Camillus, Caesar, Pompeius, L. Memmius, L. Aemilius, Paulus,*

Cato, Fabius Maximus, Marcellus等があがっているが、この中DrususとTorquatusを除いてすべてJuv.にある。

このような共和制末、帝政初期の詩人に於て *exempla maiorum* が行動の模範となっていたことはCicero演説 *Pro Sestio*. 143からもわかる。

「この国を強国にしてくれたBrutusやCamillus, Ahala, Decius, Curius, Fabricius, Fabius Maximus, Scipio, Lentulus, Aemilianus, その他数え切れぬほど多くのわが国の英雄達に倣おうではないか。」また銀の時代に於ても *exempla maiorum* が徳の模範として権威を持っていたことは次のQuiutilianusの一節 (XII. 2. 29) から知ることが出来る。

「FabriciusやCurius, Decius, Mucius. その他数え切れぬほど多くの古代ローマの英雄達以上に武勇や正義や忠誠心, 自制心, 質実剛健, 苦痛と死の軽蔑を教えてくれる人があるであろうか。」

Juv. の場合の *maiores* の範囲は、古典期から少し時代がへだたっているので *maiores* としてはRomulusから帝政に入るまでのローマの偉人と定義してよいであろう。ただ *maiores* の言及があってもそれが直ちに *exempla* になっているとは限らないので、各 *satire* の *context* の中で *maiores* のそれぞれがどのような機能を果しているか見ていきたい。

II. *exempla maiorum*

1 歌には直接 *maiores* に対する言及はない。ただ漠然と先祖を表わす *avus* が1度だけ出てくる (l. 95)。

「先祖の誰がこれほどの別荘を建てたろう。誰が7人前もの食事をしたであろう。」即ち現在の食事及び住居の贅沢さに対し質素であった昔が対置されている。ここには既に質素な古代への郷愁が見られる。

2 歌の始めでは厳格さで名高いCurius (l. 3), Scaurus (l. 35), Cato (l. 40) を装う者として偽善者が指弾されるわけであるが、槍玉にあげられる例を見ると一般に言われるように偽善者やホモの攻撃というよりは、貴族のその生れにふさわしくない行為の批判に重点があることがわかる。そのことは143行以下のGracchusという高貴な名前, Catullus, Paulusの後裔, Capitolinus, Marcellus, Fabius という名前からも明らかである。Gracchus等の行為が先祖の人々にとって不名誉極まりないことは153行以下の輝かしいローマの英雄達の言及ではっきり示されている。

「この地上からこんな連中の魂がやって来たら, Curiusや両スキピオ, Fabricius, Camillus, Cremeraで倒れたFabius家の人々, Cannaeで倒れた青年達は何と思うだろうか。」

もしあれば、硫黄や松明や湿った月桂樹の枝で穢れを清めたいと思うであろう。」
3 歌にはNumaが2度出てくる。l. 12f. ではかつての自然のままの聖林や、泉への憧れが表明され、l. 137ではNumaのような心正しい人でも貧しければ、その敬虔さまで疑われることが嘆かれている。l. 137でNumaと共に言及される Scipio Nasica, Metellus Caecusも敬虔さで名高い人物の例としてあげられている。

「誰かIdaの女神を迎えた人ほど心正しい人がローマにいれば見せてくれ。またNumaが、燃える神殿からおびえるMinervaを救ったMetellusのような人がいるなら進み出よ。」

ここにmaioresの時代への憧れを見ることは出来るが、これらのmaioresは行動の模範として示されているのではなく、ただ、当時の風俗との対照、即ち現状を嘆くために導入されている。l. 312f. も同様で、ローマに牢獄が1つしかなかった時代への憧れは現状に対する嘆きと一体になっている。この3歌は *suasoria* の形をとっており、都の諸悪の攻撃という *invective* と言うよりは *querela* であり、逃避の姿勢で書かれている。その結果maioresの時代は *exempla* としてではなく牧歌的黄金時代として扱われている。

4 歌では102行目にBrutusの名が出てくるが、これは馬鹿な振りをして危険を避ける策に言及しているだけで *exempla* ではない。

5 歌36行目のBrutus, Cassiusの誕生日はストア派の習慣について述べたもので *exempla* ではない。56行以下ではげちな主人が自分にはTullus Hostilius, Ancus Marciusおよびその他の王のすべての家財より高価な奴隷をつけていることが嘆かれている。ここには修辭的誇張による若干の怒りが認められはするが、この王たちは5 歌全体の調子に合わせて嘆きを強調するために導入されていると考えてよいであろう。

6 歌は女性攻撃の *satire* である。162行目では、髪を振り乱して戦争をひきわけたSabiniの貞潔な女が当時の不貞の女性にはっきり対置されている。l. 265f. の徳の誉れ高いLepidus, Caecus, Metellus, Gurges, Fabiusの名前はその子孫の女達が先祖の名を恥づかしめていることを示している。ここにもJuv.の攻撃が一般の女性というよりはむしろ貴族の女性に向けられていることが明らかになっている。342f. ではNuma個人というよりはNumaの時代の人々が敬虔であり、それにくらべると当時の人は如何に不敬虔となっているかが嘆かれている。l. 604のScaurorumはl. 265 と同様、問題の女性が高貴な身分であることを示す。総じてこの *satire* では *exempla maiorum* は際立つた働きをなしていない。代りに、冒頭にSaturnusの黄金時代が詳細に描写されている。これはJuv. が当時の女性に全く絶望し、矯正することは全く考えていなかったためであろう。

7 歌199行以下で、運命の移り変りの激しさを示す例としてVentidius BassusとServius Tulliusがあげられているが、これは *locus communis* としての引用で *exempla* をなしてはいない。207 行以下では昔は教師に対して敬意が払われていたとして現状が嘆か

れている。

「先生を親の如く尊敬すべきであると考えた先祖の人々の骨壺の上には大地が薄く、軽くのしかかり、絶え間ない春があり、香ぐわしいクロッカスが咲くように。祖国の山で Achilles は Cheiron からリュラの弾き方を習ったが、この Kentauros の尾を見て笑ったりすることは決してなかった。」

ここでは maiores という言葉が使われてはいるものの、その代表として引かれるのはローマ人の maiores ではなく、ギリシア神話の Achilles と Cheiron である。一見、Juv. の maiores は神話の世界まで及ぶかのようなのであるが、Cheiron の話はかなりふざけて言っているので Juv. が Achilles を真の maiores の 1 人と見なしていたわけではなく、単なる牧歌的憧れが表明されているだけであろう。

8 歌は 19 行目の「武勇を示すことの出来た者だけが真の貴族である。」をテーマとしているため当然ながら maiores への言及が多い。一つには高貴な身分の者への呼びかけがあり、もう一つには身分は高くなくても自からの努力によって名声を得た者達の exempla がある。l. 1 ff. では武勇によって名を遂げた先祖 Aemilianus, Curius, Corvinus, Galba, Numantinus, Allobrogicus の像がその子孫と対置されている。l. 20f. では模範とすべき maiores として Paulus, Cossus, Drusus があげられている。

「Paulus, Cossus, Drusus の徳に倣え。美德を君の先祖よりも尊重せよ。君が執政官になった時、束桿よりも美德が君を飾るように。」

l. 37 では戦功をとげた貴族の代表として Creticus と Camerinus が言及されている。l. 181 ではやはり名家の代表として Volesus, Brutus が言及されている。l. 188 も同じく貴族の代表として Fabius 家と gens Aemillia に属する Mamercus 家への言及がある。勿論、このような名家の名前の言及は l. 135ff. にあるように、罪を犯す者の身分が高ければ高いだけ、それだけ目立つものであり、先祖を恥かしめるものであることを指摘するためである。8 歌で最も印象的な exempla は l. 237f. の Cicero による Catilina の陰謀粉碎を称える箇所、彼の名声は Octavianus の Philippi の戦い、Actium の海戦の勝利を上回るものとされている。続く l. 245ff. も身分は低いながら輝やかな戦功をたてた Marius は貴族の同僚 Catulus より栄誉あるものとされる。続いて l. 254f. には Decius 父子、l. 259f. では Servius Tullius が同じ exempla としてあげられている。これらの英雄に対し、国家の反逆者、Brutus の息子が逆の exempla として、もっと彼等にふさわしい事、Cocles, Mucius, Cloelia などが感心するような行為をすればよかったのにと嘆かれている。この 8 歌は間もなく属州総督として任地に赴こうとする貴族の Ponticus に対する suasoria の形をとっている。明らかに Juv. はこの Ponticus は聞く気があり、矯正可能と見なしている。従って Juv. はその行動の指針を明確にする必要を感じ、多くの exempla maiorum をひいてきている。

9歌ではl. 141f. でNaevolusが控え目な願いとして監察官Fabriciusによる取り締りの対象になるような銀器をLaresに祈っている。ここではexemplaというより厳格さのlocus communisとして使われていると言える。

10歌には行動の模範となるローマのmaioresは1人もあがっていない。代りに8歌では大いに称えられたCiceroとMariusが好ましくないexemplaとしてあげられているが、これについては後で述べることにする。

11歌77行以下でCuriusの時代の質素な食事に対し当時の食事の贅沢さが批判されている。

「これはかつて私達の元老院の豪華な食事であった。Curiusは小さな菜園から取ってきた野菜を自から小さな暖炉の上にのせたものであった。今では、大きな足枷をつけた汚ない鋤山の奴隷でも暖かい料理店の豚の子宮を食べたことがあるので、このようなものは見向きもしない。」

l. 90では当時の家具の豪華さがFabius, Cato, Scaurus, Fabricius, さらにM. Livius SalinatorとC. Claudius Neroの両監察官の時代に照されて批判されている。このsatireではexemplaは当時の贅沢さを批判する権威としてひかれているだけではなく、実践道徳としてJuv. 自身が行動する規準となっている。

12歌にはmaioresへの言及は全くない。

13歌では38行以下で若者が年長者に対して敬意を持つていた時代を黄金時代として憧れているわけであるが、ここの38行目から53行目に至る神々の描写はただ単に「近頃の若い者は～」と言うだけのものとするやと仰々しすぎて滑稽な感じがする。黄金時代にはそもそも老年などなかったのであり、Juv. は老人としての自分の不満を回りくどく述べただけだと言える。

14歌39行では悪徳の見本としてのCatilinaに対し有徳の人の代表としてBrutusと小Catoが言及されている。しかしながら、ここでの名前だけの引用は非常に陳腐な印象を与え、Juv. はストア派の cliché を借用してきただけのように思える。l. 160の「RomulusとTatiusが共同統治していたころのローマ国民が耕していただけた土地を持つならば」というのは昔のローマの領土は狭いものであったことを暗示していると解してよい。しかし、l. 161f. では数々の戦功をたてた後2 iugerumもない土地に十分満足していたローマの兵士達が言及される。この兵士達の166～171行での素朴な生活の描写はJuv. がそのような生活に強い憧憬を抱いていたことを示す。

「それだけの土地で父親とその家族を養うのに十分であった。家では身重の妻が横たわり、奴隷の子1人を含む4人の子供が遊んでいた。しかし、畑仕事から帰ってくるその兄達のためには別のたっぷりと粥の入った鍋が湯気をたてていた。」

またl. 179f. のMarsi, Hernici, Vestini族の老人の「食卓に十分なだけのパンを鋤によ

らて求めよ。」という言葉はmaioresの生活の讚美であると同時に、地方の生活の讚美であると言える。ここにはavaritiaを避ける方法として1つの望ましい生活がはっきり示されている。l. 237f. のDecius父子、Menoceusへの言及は祖国愛の深さだけを示すlocus communisとしてとってきたものでexemplaとして使われているのではない。

15歌109行でMetellusへの言及は年代を示すためにだけ引用されている。

16歌15行目の「Camillusの時代の慣習」はただ厳しい風紀のことを言っているだけでexemplaをなしてはいない。

maioresはlocus communisとしての用例も多いが、大体に於いてinvectiveの1, 2, 6歌、それと8歌の一部では攻撃のために使われ、彼等が彼等の先祖に対して不名誉な存在であることが指摘される。攻撃的性格の少ないquerelaのsatire, 3, 5, 7歌では黄金時代の表象と同じで、古代に対する単純な憧れ、chronological primitivismの表明である(2)。説得のsatire 8, 11, 14歌では行動の指針として提示されている。結局、maioresはそのsatireの性格に応じて導入されており、satireが説得を目的としている時のみ真のexemplaとしての働きを持っていると言える。

Ⅲ. exempla sapientium

さて次にexempla maiorumと並んでJuv. の道徳的基盤になっていると思われる哲学及び哲学者に対する態度を見てみたい。

2歌4行以下でChrysispos, Aristoteles, Pittakosの名が言及されているが、すべて名前だけで、Juv. はこれら哲学者の名前をただ哲学者を代表する者として任意に選んでいるのではないと思われる。これら哲学者に対してJuv. がどう思っていたかは明らかではないが、少なくとも当時の哲学者と称する者達に対しては不信の目を向けていたようである。特に65行目でLaroniaの反駁を聞いて逃げて行く似非哲学者をStoicidaeと呼んで軽蔑している。

同じことは3歌116行目のStoicusについても言える。

「Pegasosの羽が落ちた岸辺で育ったストア派の老人は親しい弟子のBareaを密告し、死なしめた。」

このストア派の老人、P. Egnatius Celerはギリシア人の陰険な哲学者達の代表としてあげられており、Juv. が当時のギリシア人の哲学者達に対しては嫌悪の情を持っていたらしいことが窺える。228f. の「100人のPythagorasの弟子の食事に十分な菜園」というのはPythagorasの弟子達が菜食主義であったことに対する言及で、彼等を一風変った、多少滑稽な存在だと見なしていたことを示す。

5歌36f. 「ThræseaやHelvidiusがBrutusとCassiusの誕生日に花輪を頭につけて飲ん

でいたようなブドウ酒』の Thrasea, Helvidius は Marcus Aurelius 1. 14 にもあげられているようにストア派の殉教者として名高い人物であるが、ここではストア派なのによい酒を飲んでいただけで別に尊敬の念は読みとれない。ただ Juv. 自身ストア派の人々の活動にかなり通じていたことは推測出来る。l. 108f. では Seneca への言及があるが、この Seneca は哲学者として立派であるというより Piso, Cotta と同様に largitio の点で cliens から見て頼もしい存在であったことが回顧されているだけで他の Seneca の行為が称えられているわけではない。

7 歌 205 行目には Socrates らしい言及がある。

「体を冷めたくする毒人参を差し出すことしかなかったアテナイよ、お前はこの人もまた困窮しているのを見た。」

この箇所は弁論術教師の窮乏が問題になっている所なので hunc を前の Carrinas に取る人が多いが、7 歌を通じて哲学者のことが、Juv. の念頭になかったとは考えられず Green, Hardy に倣って Socrates を指していると解してよいであろう⁽³⁾。すると Juv. は Socrates をその活動の割には報いられることの少ない哀れな人々の 1 人と見なしていたことになる。

8 歌 211 行では再び Seneca への言及がされている。

「もし自由な選択が許されるならばネロよりセネカを選ぶことをためらうほど墮落した者が誰かいるであろうか。」

ここでセネカは一応立派な人物と見なされているわけであるが、230 行目までネロに対する激しい攻撃がなされていることを考え合わせると、Juv. の Seneca に対する評価はそれほどでないように思われる。5. 108f. で見たように largitio という点だけで Juv. は Seneca を評価していたのではないか。10. 16 では Seneca はただ単に大金持 (praedives) として引用されている。

10. 28f. ここに於て始めて 2 人の哲学者 Demokritos と Herakleitos が sapientes として称えられている。Demokritos についてはさらに l. 49f. で偉大な exempla を示すことが出来る summus vir であると称えられている。ここに於て exempla はローマの英雄からギリシアの哲学者に移った観がある。l. 273f. では有名な Kroisos と Solon の対話の言及がある。ここで Juv. の要約は極めて短いものであるが、「結末を見なければ人間が幸福であるとは言えない。」という言葉は 10 歌の愚かさの exempla としてあげられるほとんどすべてに対して妥当し、Juv. の Solon に対する高い評価を思わせる。

11, 12 歌には哲学、哲学者に対する言及はない。

13. 19f. 「神聖な書物にその教えが書かれている運命に打ち勝つ sapientia は偉大ではあるが、人生の学校で軛を投げ捨てることなく逆境に耐えるすべてを学んだ者達をも私は幸福と考える。」この sapientia は言うまでもなく metri causa による philosophia の

代用形であり、運命に打ち勝つことができるものとして哲学の権威が認められているものの、同時に同じだけの権威が人生によって経験を積んだ者に与えられている。同じことはl. 120f. についても言える。

「キュニコス派の教説も、キュニコス派とは下着1枚しか変わらないストア派の教説も読んではいないし、小さな庭の野菜を喜ぶエピクロスを尊敬もしない者がどのような慰めの言葉を与えることが出来るか聞きたまえ。重病の病人はより立派な医者に見てもらうがよい。しかし君はヘポ医者のPhilipposの弟子にでも血管をまかせるがいい。」

ここに於てもキュニコス派、ストア派、エピクロス派の哲学者は*medici maiores* (より偉大な医者) に譬えられているが、Juv. 自身はどの学派にも属さず、経験によって分別を身につけた者である。l. 184には復讐の禁止を説く権威としてChrysippos, Thales, Sokratesへの言及があるが、この中Thalesの言行録には「敵が不幸な状態にあるのを見ると自分の不幸に最も楽に耐えることが出来る。」とあり、Juv. が本当にThalesについてよく知っていたら恐らくここでは名を挙げなかったであろう。Duffも指摘しているように(4)ここでJuv. は思いつくままに哲学者の名前を挙げたと思われる。続く*Plurima*…*Sapientia*はJuv. の哲学に対する態度を考える上で一見重要かに思えるが、続く*quippe*とのつながりが悪く、Clausenに従って省いてよいであろう(5)。

14. 308ff. では金持の故に夜も不安で奴隷の消防隊に夜通し番をさせているLicinusに対し壊れればすぐに修繕がきき、また別のを容易に見つけることが出来る酒だるを家にしているDiogenesが全世界を支配しているAlexandros大王より幸福なものとして称られている。しかし、実際の生活の程度としてはl. 316f. でキュニコス派のような無一物の状態ではなく、エピクロスやソクラテスにとって十分であっただけの財産、即ち、飢えと渴きと寒さを防ぐのに十分なだけの財産を持つことを勧めている。この「自然の必要と*sapientia*の要請は一致する。」というのはまさしくJuv. 的で、Juv. が考えていた哲学は実生活から離れた特別のものではないことを示している。

15. 105f. ではVascones族が長期に渡る包囲の後、死んだ味方を食べたことに対しZenonの教えが当時まだ普及していなかったことが嘆かれている。しかしながら、Duff, Friedländerが指摘しているように(6)このような場合ストアの教義は是認したであろうことは間違いない。この「命のためにすべてが許されるわけではない。」というのはいストアの教義であるが、Juv. はストア思想について中途半端な知識しか持ち合わせていず、13. 184f. の場合と同様、思いつくままにZenonの名前をあげたように思える。l. 171f. の「動物の肉を一切口にしなかったPythagorasがこのような人食い人種を見たら何と言うだろうか。」というのはい3. 228f. と同様、菜食主義というPythagorasの変った習慣故の引用で、別にJuv. がPythagorasに倣うべきだと考えていたわけではないであろう。

Juv. は2. 3歌で哲学者を装う偽善者に対して激しい非難を浴びているが、1～9歌

を通して一般の哲学者、哲学については特別の関心を抱いていないように思える。ところが10歌になるとローマのmaiores以上に哲学者は模範となっている。しかしながら13～15歌をよく見るとJuv.の哲学に対する理解は深いものではなく、Juv.自身が人生経験で悟った処世訓をただ補強しているもののように思える。Juv.が模範とする哲学者はmaioresと同様、luxuriaeを軽蔑し、清貧に生きる哲学者達であった。

IV. 10歌の問題

前に見たように8. 237～244に於てCiceroはCatilinaの陰謀を粉碎し、Octavianusにも優る名誉を獲得したと称えられている。弁論術に深い関わりを持っていたと思われるJuv.にとってCiceroは輝かしい理想であったに違いない。ところが10歌になるとCicero像は一変する。10. 114～126.

「弁論術を学ぶ者は誰もがDemosthenesとCiceroの名声に慄れる。……しかし、あふれる才能の泉が両者を破滅に導いた。……

キケロは才能故に首と両手を切られることになった。下手くそな弁論家の血で演台が濡れることはない。『ああ、私が執政官の時生まれた幸せなローマよ。』キケロもずっとこの調子でやっていればAntoniusの剣を笑い飛ばすことが出来たであろう。オ2ピリツピカよ、輝かしい名声のお前よりも私には笑うべき詩の方がよい。」

ここにはもはや8歌に見られたようなキケロに対する称賛の念は微塵もみられない。それどころか、123行目のAntoni gladios potuit contemnereは諸注にあるように明らかにPhil. ii. 118のcontempsit Catilinae gladios, non pertimescam tuosにあてつけたもので、最後のキケロの億病な態度に対する軽蔑が含まれていると解することが出来る。8歌と10歌の比較においてももう1つ考えなければならないのはMariusのexemplaである。8. 245～253では「身分は低いながらも苦勞して將軍となりCimbri族を破ってローマの町を守った時、同僚の貴族のCatulusより大きな名誉が与えられた。」となっている。これが10歌276～282では長生きしたがためにMinturnaにおいて、Carthagoにおいて大変な勞苦を忍ばねばならなかった逆のexemplaとしてあげられている。ただここで注意しなければならないのはMariusの軍功は無意味なものではなく、非常に輝かしいものであったとされ、ただ長生きしたことが悪かったとされている点である。ところが、同じ10歌でもl. 133～146ではあらゆる軍功が徹底的に軽蔑され、偉業を刻んだ墓石でさえ、やがては崩れ忘れさられる空しいものであることが強調されている。10歌全体を通じて強くペシミズムが感じられることはよく言われるが、Juv.の迫力ある描写と論調はポーズである可能性がある。即ち、長寿を願う箇所Mariusのexemplaがはっきり示しているように、Juv.はその場その場に合ったcolorを導入するためexemplaを選んでいるので

はないかと思われる。

8. 231～236で墮落した貴族の代表としてあげられているCatilinaとCethegusも10. 287 f. では五体満足なまま死ぬことが出来た故Pompeiusより恵まれた者として祝われている。

Lateranusについても8歌では146行から178行にわたって長々とその放埒ぶりが非難されているが、10歌では17, 8行の僅か2行で、その富故にネロの親衛隊に家を包囲されることが言及されるだけである。8歌ではLateranusの執政官としての振舞が問題となっているだけでその富に全く言及されていないことは注目に値する。

このように見てくるとJuv. は各人物を決してその全体像を浮かび上げようと描写することはなく、その時その時の目的に合うようにその部分像を提示していることがわかる。しかしながら、このことはJuv. に確たる理想の人間像がなかったことを意味するわけではない。Ⅱで見たように、Curius, Fabricius, Catoは常に敬意をもって引用されている。これらのmaioresはValerius Maximusにもあるように⁽⁷⁾frugalitasの模範としてローマ人の間に定着していた。Ⅲ. で見たようにDemokritosやDiogenes, Epikurosに対するJuv. の関心もそのfrugalitasによるものであった。それに反し、Ciceroにはそのような生活態度は欠けていた。従って8歌に於けるCiceroの讃歌もJuv. の心からの讃歌ではないであろう。ローマ人のCiceroに対する評価はさまざまであった。VergiliusがAeneis VI. 849でorabunt causas meliusと言ってCiceroを全く無視していることはよく知られている。またCiceroとAntoniusという題材が好んでdeclamatioに取り上げられていたことは大セネカ, suasoriae. 6から知ることが出来る。心からCiceroを尊敬していたのでないJuv. がこの題材を選んだことは不思議ではない。Juv. の真のmaioresの中にCiceroは入っていなかったのである。

注

(1)Juv. 1. 15ff.

(2)cf. R. Vischer, Das einfache Leben, p. 89.

(3)P. Green, Juvenal, The sixteen satires. E. Hardy, The satires of Juvenal, ad loc.

(4)J. Duff, Juvenal, Satires, ad loc.

(5)W. Clausen, D. Iunii Iuvenalis satirae, ad loc.

(6)J. Duff, op. cit., L. Friedländer, D. Iunii Iuvenalis satirarum libri V mit erklärenden Anmerkungen, ad loc.

(7)Valerius Maximus, IV. 3. 5, 6, 11 et al.